映画字幕は視聴者の期待にどう応えるか

篠原有子
（立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程）

This paper aims to identify the expectations of film audiences for Japanese subtitles and explores measures subtitlers can take to meet those expectations. According to a survey conducted on a group of 50 audiences, even though the use of subtitles is widely accepted, people tend to have a rather negative opinion regarding the quality of subtitles. This is because they attach great importance to the dialogue coming from the screen. Subtitlers are aware of people's mistrust of the quality of subtitles but it is not easy for them to cope with such issues because of the time and space constraints associated with subtitling. However, film subtitles for DVDs are gradually changing by adopting some fansub features (subtitling by fans for fans), such as glosses and headnotes, and this trend could lead the way to meeting audiences' expectations for subtitles.

1. はじめに

外国映画輸入配給協会が 2004 年から発表している「外国映画上映作品一覧」によると、2004 年の外国映画上映数は 349 本で、そのうち字幕版は 322 本、吹き替え版有（字幕版と吹き替え版の両方を制作した作品）は 26 本、吹き替え版は1本である。これに対して 2010 年の外国映画上映数は 328 本で、そのうち字幕版は 289 本、吹き替え版有は 31 本、吹き替え版は 8 本となっており、2004 年と比べると吹き替え版の増加が見て取れるものの、日本で公開される外国映画の大部分が字幕版であると言うことができる。1931 年に初めて『モロッコ（Morocco）』（スタンバーグ監督）に日本語字幕が付けられた（田中 1976）のを皮切りに、日本ではほとんどの外国映画が字幕付きで上映されてきたが、その状況は現在に至るまで変化していないことが分かる。

その一方で、字幕を取り巻く環境に目をやると技術革新と共にさまざまな変化が起きている。まずビデオや DVD の普及によって映画の鑑賞方法が多様化したことが挙げられる。例えば DVD では字幕、吹き替え、文字化された起点テクストを選択することができるようになった。また 1980 年代からアメリカで始まったアニメ愛好者による字幕（ファンサブ）は当初はビデオを介したものであったが、近年インターネットが普及した結果、ウェブ上の動画などを介して世界的

SHINOHARA Yuko, "How can film subtitles meet an audience's expectations?" *Interpreting and Translation Studies*, No.12, 2012. pages 209-228. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

な広がりを見せている（Leonard, 2004）。これは字幕の消費者であったアニメファンが字幕の生産者になるという、従来になかった変化である。映画字幕が参与者間の相互作用を通して作成されることを考えると、社会環境の変化は字幕にも何らかの影響を与えると思われる。こうした状況に対応するために、本稿では視聴者[1]の望む字幕とはどういうものか、それを字幕に反映させるにはどのような方策があるかについて考察する。

まず視聴者に対するアンケート調査の結果を分析し、視聴者がどのような字幕を期待しているのかを探る。次に字幕翻訳者へのインタビュー調査の結果から抽出された字幕翻訳者が想定する視聴者の期待を提示したのち、映画字幕を分析し、字幕（目標テクスト）に視聴者の期待がどのように反映されているか（あるいは、いないか）を検証する。それを踏まえて視聴者の期待を反映させる方策の可能性について、ファンサブという新しい形態の字幕との関連も含めて考察する。

2. 視聴者の期待

翻訳の読者がどのような翻訳を期待しているかについて、チェスタマン（Chesterman, 1997）は期待規範（expectancy norms）という概念を提示している。それによれば期待規範は「（あるタイプの）翻訳の読者が抱いている、（このタイプの）翻訳はどのようなものであるべきかという期待」[2]（Chesterman, 1997: 64）であり、それと同時に、翻訳についての評価的判断を下すものとされる。つまり映画字幕であれば、視聴者は映画の視覚コードと音声コードから得られる情報をもとに、時代設定、登場人物の風貌や性格、声のトーン、場面状況などを認識し、それらに適合した字幕を期待するかもしれない。そしてその期待が満たされたときに、字幕を許容するという判断を下すのである。しかし、翻訳者が視聴者の期待を知る機会はほとんどないと思われ、そのため翻訳者は視聴者の期待を想定しそれに基づいて訳出を行うことになる。このことは翻訳者の想定した期待が必ずしも視聴者の期待と合致するとは限らないことを示唆している（Pym, 2010: 128）。そこで本稿では視聴者がどのような字幕を期待しているかを知るために、視聴者を対象に実施したアンケート調査の結果から字幕に対する期待を抽出することにした。

2.1 字幕翻訳の持つ制約

アンケート調査の内容に入る前に、字幕翻訳の制約について簡単に述べる。字幕には大きく分けて次の 3 つの制約がある。つまり、①1 秒 4 文字の字数制限、②台詞の長さは最大 6 秒、③1 行 13 文字で 2 行まで、という制約で、このことから字幕は時間と空間の制約を受ける翻訳であると言うことができる。また視聴者は字幕のほかに映画の音声コードや視覚コードも認識する必要があることから、字幕を読むことは「小説や新聞を読むのに比べて、より労力を必要とする作業」（Díaz-Cintas & Remael, 2007: 103）とされる。

2.2 視聴者へのアンケート調査

視聴者がどのような字幕を期待しているのかを探るために、アンケート調査を実施した。実施場所は都内の映画館（シネコン）とし、上映開始を待つ人にアンケート用紙を配布しその場

で回収する方法を取った。アンケート調査実施に際しては、調査の趣旨、調査内容、実施の日時および調査結果の公表について、当該映画館の担当責任者から了承を得た。回答者は 2 日間で 50 人であった。なお、アンケート調査は外国映画の言語を限定せずに実施したが、日本で公開されている外国映画の状況から推測して、視聴者が鑑賞する外国映画の多くは英語を起点言語とする作品であると思われる。よって調査対象者の回答は主に英語の映画を念頭に置いたものと考えられ、したがって起点言語が英語以外の場合は、今回と異なる調査結果を生じる可能性がある。また、このアンケート調査はサンプル数が限られているため、本稿では量的分析ではなく全体的な傾向を把握するにとどめる。

2.2.1 調査内容と結果

アンケート調査に対して寄せられた回答を以下に示す。全質問項目を巻末資料に付したが、調査票作成にあたっては戸田（1994）、Widler (2004)、Díaz-Cintas & Remael (2007)を参照しつつ、字幕の中の異文化要素、および字幕翻訳の持つ制約とされる各要素（字数制限、映像との整合性、起点テクストの保持）に焦点を当て、質問項目を案出した。

日本映画か外国映画か

日本映画と外国映画のどちらを多く見るかという質問に対して、50 人中、32 人が外国映画を、9 人が日本映画を多く見ると回答し、1 人は同程度という回答であった。外国映画が圧倒的に多い結果になった要因としては、調査場所に選定したシネコン（スクリーン数 11）の上映スケジュールがあると思われる。当該劇場は各スクリーンで多様な作品を上映していたが、その中の一つがハリウッドの人気映画『パイレーツ・オブ・カリビアン／生命の泉』（ロブ・マーシャル監督）であったため、回答者の中に同作品をはじめとして、外国映画を見る人が多かった可能性がある。

字幕を選ぶ理由 [3]

同じ作品に字幕版と吹き替え版がある場合は、「字幕版を選ぶ」40 人、「吹き替え版」9 人、「作品による」1 人という結果が出た。最近は 1 作品につき字幕版と吹き替え版の両方を制作する作品が増えているが、今回の調査では字幕版を選ぶ人が多かった。しかし、「吹き替え版を選ぶ」と答えた人からは、「字幕に集中すると映像が楽しめない」「時々、字を読むのに精一杯で、映像をあまり見られないことがある」という回答があり、字幕を読むのを煩わしく感じていることが認められた。次に字幕版を選ぶと答えた 40 人にその理由を聞いた結果（複数回答）と、それを年代別にまとめたのが下の表である。

表 1　字幕版を選ぶ人の年齢構成と選んだ理由の内訳（複数回答）／＊「どちらを選ぶか作品による」
（1：俳優の声が聞けるから　2：雰囲気が感じられるから　3：語学の勉強になるから）

人数	8	13	6	3	3	6	1	40
年齢	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計(人)
声 [1]	3	9	4	2	3	4	1	26
雰囲気 [2]	6	8	3	2	2	3	0	24
語学 [3]	4	4	0	2	1	2	0	13
その他	0	1	0	2	0	(1) *	0	3

「俳優の声が聞ける」と「語学の勉強になる」が多いことは視聴者が映画の音声コードを重要だと感じていることを示すものであろう。これは字幕翻訳が常にオリジナル音声と比較される「弱い立場の翻訳（vulnerable translation）」 (Díaz-Cintas & Remael, 2007: 57)であることを裏付けている。しかし、視聴者はオリジナル音声（音声コード）を重視しているものの、映画には字幕作成の際に音声よりも優位にある(op. cit.: 51)とされる映像（視覚コード）がある。つまり視聴者は映像を認識しながら、同時にオリジナル音声と字幕を比較するという、複雑な認知的作業を行っていると思われる。そのため字幕の読解に時間が割かれる場合には、映画の他のコードを理解することが困難になるかもしれない。それを避けるために、「チラッと目を走らせただけで、なんなく内容のつかめる文章」（戸田　1994, p. 150）が求められると考えられる。また、その他の理由として、聴覚障害があるので字幕を選ぶとの回答が 2 人から寄せられた。

字幕に対する違和感とその理由

50 人中 40 人が字幕版を選ぶと答えた一方で、アンケート調査の自由記述欄には、字幕内容に関する感想として次のような記述が見られた。

・俳優のしゃべっていることと、字幕の内容があまりに違っている時、なんだろうと思って嫌になる。
・日本にあまりない表現を無理やり日本語表現に置き換えている。
・誤字や間違った表記が時々ある。人材の育成が必要。
・複雑な言い回しの台詞のときなどは、意味はそのままで、なるべく瞬時に理解できるような文章に直してもらいたい。
・この訳で本当に合っているのか時々気になる。
・文字数が限られているので仕方ないのだが、たまに言っていることと書いていることが違うときがあるので、違和感がある。
・もう少し本編に忠実な字幕を作ってくれるとありがたい。

これらは、いずれも視聴者が字幕の品質に違和感や疑念を抱いていることを示す記述である。

ではどの程度の人が字幕に違和感をもっているのだろうか。

表 2 字幕に対する違和感

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計（人）
ない	3	8	2	1	2	3	1	20
時々ある	6	9	4	2	2	3	0	26
よくある	2	1	0	0	0	1	0	4

「時々ある」と「よくある」を合計すると、全体の半数以上が字幕に違和感をもつことがあると答えている。しかもこれは 70 歳代を除いてどの年齢層にも共通した感想であった。どのようなときに違和感をもつかという質問には、次のような結果が得られた。

表 3 字幕に対する違和感の理由（複数回答）

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計(人)
多字数 [1]	1	0	0	0	1	0	0	2
矢継ぎ早 [2]	1	1	1	1	1	2	0	7
映像 [3]	1	3	1	0	0	0	0	5
未知語 [4]	1	1	0	1	1	0	0	4
不一致 [5]	8	6	2	2	0	2	0	20
その他	1	0	0	0	0	1	0	2

（1：字数が多いとき 2：矢継ぎ早に字幕が出るとき 3：映像に集中したいとき 4：見慣れない言葉のとき 5：台詞と字幕の内容が一致しないと感じたとき）

「台詞と字幕の内容が一致しないと感じたとき」が 20 人と最も多く、他の項目を引き離している。つまり視聴者の半数以上は字幕に何らかの違和感を抱いており、その中で最も多いのが字幕の品質に対する疑念だということになる。次に字幕のいくつかの要素を取り出して、違和感や疑念との関連を探っていく。

字数制限

下記は字幕に使用される文字数をどう感じているかを視聴者に聞いた結果である。

表 4 字幕の文字数について

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計(人)
よく気になる	0	1	0	0	0	0	0	1
時々気になる	6	8	3	1	2	3	0	23
考えたことがない	5	9	3	2	2	4	1	26

前述のように字幕には 1 秒 4 文字の字数制限がある。ただ通常は±2 文字程度の幅があり、片仮名が入る場合は制限字数を越えても許容される場合が多い。調査では文字数が気になる人と気にならない人の数は、ほぼ同じ割合であることから、半数は従来の文字数を容認していることが示された。ただ自由記述の中に「DVD だと（文字数が）長いと感じることがあった。劇場版のほうがシンプルな気がする」との回答があった。これは DVD に比べて劇場版の方が字数制限に厳しい傾向があるためではないかと思われる。つまり劇場での聴視は 1 回限りであるため、文字数の多い字幕や意味の取りにくい字幕は極力避ける必要がある。それに対して、DVD は仮に読み切れない場合でも、何度も再生して読み返すことが可能である。そのため DVD は劇場版に比べて文字数が多くなる傾向にあるかもしれない。日本では文字数に関して DVD とそれ以外では明確な差はないが、他の地域では DVD での文字数を多めに設定している例がある（op. cit.: 98-99）。

異文化要素

映画の台詞には起点言語の文化に由来する語彙が多く含まれている。これらの語彙は起点言語の歴史、地理、文化などと深く関わっているため、訳出の際に困難を伴うものが多い。異文化要素の一例としてバンデェウェイェ（Vandeweghe, 2005: 40-41）は、①地理的なもの（サバンナ、トルネードなど）、②文化人類学的なもの（ガウチョ、コックニー、タパス、インチ、ポンドなど）、③社会政治的なもの（カウンティ、KKK、プロヒビションなど）を挙げている。これらの語彙をはじめとして、異文化に関する見慣れない語彙や海外の固有名詞は視聴者にとっては異質なものと映るであろう。アンケート調査では字幕中のこれらの語彙をどう認識しているかを尋ねた。

表 5　字幕に見慣れない言葉や固有名詞があるとき

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計（人）
興味がわく	6	10	3	2	1	3	0	25
特に感じない	5	6	3	1	3	3	1	22
違和感がある	0	2	0	0	0	1	0	3

結果を見ると、「興味がわく」は最多の 25 人で、次は「特に感じない」の 22 人であり、50 人中 47 人が見慣れない語彙に抵抗感がないとしている。

日本語字幕では通常、ポンドやフィートなどの計量単位をグラム、メートルなどに換算して表示しているが、これについて視聴者はどうすべきと感じているのだろうか。

表 6 単位換算について

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計(人)
外国の単位で	3	5	0	2	0	1	0	11
換算する	6	10	4	1	3	3	1	28
考えたことなし	2	3	2	0	1	3	0	11

現状のままでよい（換算する、考えたことなし）とする回答が 50 人中 39 人であった。これは異文化要素である計量単位については、異質なままで提示するよりも従来どおりの換算（同化的訳）を望む人が多いことを示している。見慣れない語彙や外国の固有名詞については異質なまま受容したいとするのに対して、計量単位は同化的に翻訳されたものを選ぶことから、視聴者の中には同化的翻訳志向と異化的翻訳志向が共存しているのが認められる。

流行語の使用 [4]

映画にはアクション、ファンタジー、コメディ、ホラーなど様々なジャンルがあるが、ジャンルによっては稀に目標言語の社会で流行している言葉を字幕に採用する場合がある。流行語の使用をどう考えるかという問いに、視聴者は次のように答えている。

表 7 流行語の使用について

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	計（人）
変だと思う	4	8	1	1	3	6	0	23
面白い	3	4	1	1	0	0	1	10
特に感じない	4	6	4	1	1	1	0	17

字幕における流行語の使用に否定的な人が 23 人であるのに対して、半数以上（27 人）が容認していることが認められた。

3. 字幕翻訳者が想定する視聴者の期待

ここでは字幕翻訳者に対して実施したインタビュー調査の結果をもとに、字幕翻訳者が想定する視聴者の期待、およびそれに基づく翻訳者の訳出志向を提示する。

3.1 字幕翻訳者に対するインタビュー調査の内容と結果

字幕翻訳者が想定する視聴者の期待を探るために、4 人の字幕翻訳者にそれぞれ 1 時間程度の半構造化インタビューを実施した。インタビュー調査の実施にあたっては、研究協力依頼書を作成し、研究の趣旨および情報公開に関して調査対象者の承諾を得た。またインタビュー内容に関しては、事前に許可を得て内容を IC レコーダーに録音し、それを文字化したも

のを確認してもらった上でデータとして使用した。ここでは上記のアンケート調査の分析結果に照らし、字幕翻訳者がどのような認識のもとに訳出を行っているのかを見ていく。

字幕翻訳者が想定する「視聴者の期待」

「視聴者が期待する字幕とは？」という質問に、4 人はそれぞれ次のように答えている。

> A: 観客が何も考えずにスーッと心に入ってきて、スーッと消えていく。だから「あれ、この字幕ちょっと変な台詞ね」と観客が思うような台詞を書いてはいけないという思いが、自分の中にある。
> B: 外国語が分からない人にとっての概要を伝えるためのサービス。一般的なもの（作品）だと、引っかかりのないようなのがいいかなと。
> C: 大多数の人は自分が読んでいるのを忘れて、映画に没頭できる字幕だと思う。見た人が「俺は英語が分かったぞ」と感じられたらパーフェクトかな。
> D: よほどマニアックなものでない限り、誰が見ても分かるようなものにしなきゃいけないということ。流れるように見られて「ん？」と思ったりしない、噛み砕かなくても読めるような字幕が一番いいんじゃないかと思う。難しい言い回しを避けるとか。

これによって、誰にでもすらすら読める分かりやすい字幕、という考えが 4 人に共通した認識であることが分かる。つまり、字幕を読んでいることを忘れるような、なるべく目立たないものが望ましいと考えていると思われる。しかし「水のように流れて忘れられる字幕というのはちょっと違う」「私らしい訳というのはどうしても出る」と語る翻訳者もいた。また A は「字幕は歌舞伎の黒衣みたいなもので、フィルムを汚している分、絶対に出しゃばってはいけない」と言う。だが一方では上記の語りとは別のところで次のように述べる翻訳者もいる。

> B: （映画の種類によっては）そういう種類の映画を好んで見る人たちにとっては、こんな感じの字幕が欲しい、難しい内容なんだから難しく訳してくれ、ということもあると思う。作り手側（映画製作者）の思ってるものを受け手側（視聴者）の、それを期待している人たちが納得するような感じで、できるだけ訳す。

これを見ると、字幕翻訳者がすべての作品に平易な字幕が求められていると認識しているわけではないことが窺える。しかし、「よほどマニアックなものでない限り」「映画の種類によっては」という但し書きが付いていることから、大多数の作品に関しては「誰にでも理解できる分かりやすい字幕が良い」と認識していると考えていいだろう。では字幕翻訳者がこうした認識を持つのはなぜなのだろうか。翻訳者の語りの中にその理由を示唆する部分がある。

> A: 観客は台詞だけを読んでるわけじゃない。絵（映像）も見てるし、主人公の顔もじっくり見たいわけだから。

B: 私が「！」をいっぱい付けなくても、顔を見れば分かる。言葉を飾らなくても役者さんの演技で十分それが伝わってくる。

つまり翻訳者が分かりやすい字幕が良いと考える要因の一つには、視聴者が字幕と映像を同時に理解しなければならないことがあると推測される。このことから、分かりやすい字幕は視聴者に認知的負荷をかけないための方策である、ということができるだろう。

字幕におけるオリジナル音声の保持

字幕翻訳者が「黒衣」として字幕を作成しても、現実には字幕は画面の下部に明確に提示され、視聴者はそれを理解しようと努める。また字幕ではオリジナル音声が保持されるため、視聴者は耳からの音声情報と字幕の文字情報を対比するという認知的作業を行っている。アンケート調査の結果から、視聴者が字幕版を選ぶ理由はオリジナル音声を重視するためであることが示されたが、字幕におけるオリジナル音声の保持が訳出をどう左右するかについて、字幕翻訳者は次のように述べている。

A: （笑いのところで）一番大事なのは、英語を聞き取れる人がいるっていうこと。耳に残る音と違いすぎないような字幕を当てつつ、タイミングが狂わないように、笑うところのツボで笑わせるような訳を当てる。
B: 聞き取れる人は字幕を見ないでほしいという主張なので。
C: 最初（翻訳学校で）習った頃に、次の人の台詞で補うみたいなのを習ったんですけど、今それしないですよね。英語が分かる人も多いし、それやっちゃうと不自然ですから。
D: 100％訳すのは無理だし、そういうの（オリジナル音声の意味）が分かる人が全員ではないので、「違うこと訳してるよね」と言われるのを覚悟でやります。

このように字幕翻訳者は、視聴者がオリジナル音声を認識していることを念頭に置きながら訳出していることが認められた。そして視聴者の聞き取った台詞が、音声と同時に字幕として提示されるのが望ましいと考えているものの、物語の展開によっては実際にはそのようにできない場合もあると述べている。しかし、字幕は視聴者によって常にオリジナル音声と比較される（Díaz-Cintas & Remael, 2007）。そのため、聞き取った言葉が字幕に反映されないことは、視聴者の字幕内容に対する疑念を生む要因となるであろう。

字数制限

字幕の字数制限は訳出を左右する要因の一つと思われる。その理由は起点テクストの情報が規定の文字数に入りきらない場合、前後のストーリーに基づいて字幕翻訳者が情報を取捨選択し、決められた字数内に収まるような訳出を行うからである。起点テクストの情報と字数制限の関係について、字幕翻訳者は次のように述べている。

A: 字幕だから字数は制限されているけど、その意味に極力近いものを持ってくる。
B: 原語で説明的なことを言ってるのを、場合によっては上手く日本語で、それこそ漢字 2 文字で表せたら字数が減らせる。そうでなかったらいろんな訳語を考えてみて、盛り込もうとしても無理だと思ったら、訳さないでカットする。どの部分をカットするかということを考えて、その上で残ったところを訳すというか、諦めるというか。
C: 基本的には次のシーンにちゃんと流れるかですよね。それが無理な場合は少し無理しても(字数オーバーでも)入れるしかないかも。そうでもない場合は、思い切ってざっくり外すとか。
D: 無理やり 2 つのこと(情報)を訳すよりも、後々の展開も考えて今訳すべきはこっちというほうを残して、あとは削るというふうに。

このように字幕翻訳者は字数制限を重視しており、字数制限で限られた情報しか盛り込めないときには、前後のシーンの流れを壊さない範囲で起点テクストの情報の一部が削除される場合があることが分かる。ではどのような情報が削除され、何が残されるのか。これについてディアス＝シンタスとリミール(Díaz-Cintas & Remael, 2007: 64)は、「字幕は最も関連のある情報に焦点を当てるため、多くの場合、コンテクストを新しくする部分は保持され、コンテクストを確認する部分は落とされる」と述べている。

異文化要素

前述のように視聴者へのアンケート調査によって、未知の語や外国の固有名詞といった字幕の中の異質な要素を、異質なまま受容する志向と同化して受容する志向の 2 つが共存していることが示された。それでは字幕翻訳者は異文化要素についてどのような訳出を行っているのだろうか。

A: 日本で使われているもので、一番近いものは何かって考えて置き換える。近づけるということは若干するけど、それはねじ曲げることとはまた別だと思う。より深い理解へ導くためのもの。
B: ケースバイケースなんですけど、訳の上にルビを振って、次からルビを字幕にするとか。日本人になじみのない語彙を入れるのは、相当計算しないといけないなという感じはありますね。
C: できれば前後の字幕で説明するような、本当はそこまで言ってないけど、尺(時間)に余裕があるところで、それが分かるような字幕が作れたら一番いいですね。できないときもありますけど。(地名などは)見る人が固有名詞に気を取られて思考が止まるよりは、「小さな町」くらいで認識しておいてくれればそれでいいかなと思います。
D: 一般的な知名度とか考えて重要度で判断して、何かに置き換えたり、訳さなかったりというふうにします。

4 人が挙げた訳出方法は、置き換え（substitution）、借用（loan）、詳述（specification）、上位語による一般化（generalization）、削除（omission）などの翻訳方略に当たる。ロムヘイム（Lomheim, 1999）によれば、翻訳者は多くの場合、複数の翻訳方略を組み合わせて訳出を行うとされることから、今回インタビューに応じた字幕翻訳者も訳出の際には、状況に応じて上記以外の方略も合わせて採用していると考えられる。また異文化要素の訳も含めた翻訳全体については「できるだけ自然な日本語」や「通常は日本で許されているような語彙だとか、普通の人が聞いたことのあるような程度の感じ」に訳すとしている。4 人の語りから推測できるのは、字幕翻訳者は目標言語と目標文化に受容されるような、同化的な翻訳を目指しているということである。しかし、字幕を受容する側の視聴者には異化的翻訳志向と同化的翻訳志向が共存しており、翻訳者側の想定との間に食い違いがあることが分かる。なお、本稿での方略用語はディアス＝シンタスとリミール（Díaz-Cintas & Remael, 2007: 201-207）に依ったが、翻訳方略については研究者によって用語の境界が曖昧であったり意味が重複したりしており、まだ統一的な分類はなされていない（ibid.）。

流行語の使用

アンケート調査では調査対象の半数以上（50 人中 27 人）の視聴者が、字幕に流行語が使用されることを容認していた。インタビュー調査では流行語の使用をどう考えているかについて、2 人の字幕翻訳者が次のように述べている。

> A： 奇をてらったようなものとか、今の流行に合わせて、やたら言葉を今風に変えたりするのは、自分の中では違うかな。
> B： 言語というのはしゃべり言葉でも書き言葉でも、しゃべっている国の人たちが共有しないと通じないわけですから、書き方もやっぱりある程度市民権を得たものじゃないと伝わりにくい。特に字幕はさっさと消えてしまうので変な書き方をしてしまうと読み切れない。

流行語は誕生して間もない言葉であり、「市民権」を得ているかどうか明らかではないとして、流行語の使用をなるべく控えたいと考えていることが窺える。これは字幕ができるだけ多くの視聴者に受容されること、すなわち受容の最大化を目的としているためと考えられる。

3.2 インタビュー調査のまとめ

以上の結果から、字幕翻訳者が想定する視聴者の期待（すなわち字幕翻訳者の訳出志向）は次のようにまとめられる。

① ストーリー性を重視した分かりやすい字幕
② 字数制限を順守した訳出
③ 目標言語と目標文化にとって異質な要素を含まない同化的翻訳

④ できるだけ多くの視聴者に受容されるような翻訳（受容の最大化）

しかし、この 4 項目は字幕翻訳者の語りから得られたものであり、彼らの明示的な発言が実際の産物に反映されているかどうかは、目標テクストの分析によって検証される必要があるだろう。

4. 字幕テクストの分析

前述した字幕翻訳者の想定する視聴者の期待を踏まえて、それが字幕にどう現れているかを検証するために字幕テクストの分析を行う。また字幕の内容が視聴者の期待と一致しているのか、あるいはしていないのかについても探る。分析の対象としては『それでも恋するバルセロナ（Vicky Christina Barcelona）』（ウディ・アレン監督、2008）と『ローマ（ROME）』（マイケル・アプテッド他監督、2007）を採用した。これらは前者がラブコメディ、後者が歴史劇であり、ジャンルも時代設定も異なっている。ジャンルの異なる複数の作品を分析対象とすることで、1 作品だけでは現れない訳出の傾向を探ることができるのではないかと考える。なお分析項目の右の数字は、その項目が前述した字幕翻訳者の訳出志向（①ストーリー性重視の分かりやすい字幕、②字数制限の順守、③同化的翻訳、④受容の最大化）のうち、どれと関連しているかを示している。

起点テクストと目標テクストにおける情報量の増減（①、②）

下記は『それでも恋するバルセロナ』のある場面のオリジナル音声とそれに付けられた日本語字幕である。夏のバカンスでバルセロナを訪れたアメリカ人のヴィッキー（V）とクリスティーナ（C）が見知らぬ男性（フアン）から自宅に誘われる。フアンが去ったあとの 2 人の会話である。

C: 1/Oh, my God, this guy is so interesting.	1/面白そうな男
V: 2/Interesting? Are you kidding?	2/どこが面白いの？
What's so interesting?	ベッドが目的よ
He wants to get us both into bed.	
3/You know, but he'll settle for either.	3/誘いの本命はあなただわ
In… in this case, you.	
C: 4/Vicky, I'm a big girl, okay?	4/私はもう大人だから
If I want to sleep with him, I will.	寝たい時は寝るわ
If not, I won't.	
（中略）	
V: 5/And if I heard right, he… he was violent with his wife.	5/妻に暴力をふるった男よ
（中略）	
6/No, it's not. I'm…I'm not going to Oviedo	6/私は行かない

7/with this… with this charmingly candid wife beater, you know?	7/妻を殴る暴力亭主なんか
8/You find his aggressiveness attractive, but I don't.	8/攻撃性が魅力なの？ よしてよ

この部分の字幕は意味的にはほぼ起点テクストを再現していると思われるが、数か所で起点テクストと目標テクストの情報量に変化が見られる。例えば#2 では 4 文のうち最初の 2 つは削除されて、後半だけが訳出されている。その理由として考えられるのは台詞の長さによる字数制限と、#1 を受ける形で#2 ですぐに「面白い」という字幕を出すことによって結束性を強め、会話のリズムを出すためではないかと思われる。また、#5 では台詞の前半が省かれて、後半が訳出された結果、伝聞であることが示されないまま初対面のフアンを「妻に暴力をふるった男」とする内容になっている。しかし、ヴィッキーは当初、フアンを警戒しており、それを強調するためにこのように訳出したとも推測される。このほかにも#6 と#7 で起点テクストの情報（それぞれ、地名、フアンの人当たりの良さ）が目標テクストでは省かれているのが分かる。

一方では、起点テクストにはない情報を追加している字幕もある。#7 ではフアンの人当たりの良さについての情報が削除されると同時に、「妻を殴る暴力亭主」として彼の荒々しさを示唆する情報が加えられている。しかし、フアンが女好きなのはそれまでの映像や台詞によって視聴者に既に提示されている。したがって、ここでは「暴力」という語を入れることで、その印象との落差を強調すると共に、ヴィッキーのフアンに対する警戒心も表していると考えられる。#8 については情報量の変化はないが、平叙文を疑問文と命令文に変化させることによって、フアンを警戒しているヴィッキーの気持ちがより強調されたように思われる。

台詞の先取りと言い淀み（①、④）

次に示すのはヴィッキーが友人のジュディ（J）と話すシーンである。

V: 9/Look, you… you mustn't feel that you have to explain yourself to me. I…	9/そんなことで 気まずく思わないで
J: 10/I mean…	10/マークは…
11/Mark is great.	11/すばらしい夫よ
12/I'm sure any…	12/もしも―
13/any dissatisfaction I have is my own problem.	13/不満を感じるとしたら 私が悪いのよ
14/I'm just…	14/そうなの
15/I can't leave him and I know that I never will.	15/やっぱりマークとは 別れられない

字幕はオリジナル音声と同時に提示されるのが基本であるが、状況によってはそのようにできない場合もある。例えば#10 は#11 の内容の一部を先取りする形で訳出されている。これは#11 の台詞の時間が短いために、許容字数内では起点テクストの全情報を入れることが難しく、そのため「マーク」という名前だけを#10 で先取りして訳出したと考えられる。#12 も同様の意図があると思われるが、これらの例のように短い字幕の場合は、台詞と字幕の食い違いが認識されやすいケースが多いと推測される。したがって言い淀みの台詞の字幕に次の台詞内容を先取りすることは、視聴者の疑念を生みやすいかもしれない。

また#14 に見られるように、言い淀み（well, now など）は、そのまま訳出するよりもコンテクストに関連のある語彙に変えたり、言い切りの形にするなどして字幕に提示される場合がある。これは 1 枚ごとに完結する字幕のほうが、言い淀みや 1 文が何枚にもわたる字幕よりも、視聴者の負担が少ないと考えられるからであろう。そのため、末尾が言い淀むように終わっている台詞でも、言い切りの形で訳出される場合があり、#14 はその一例と言っていいだろう。

説明的な字幕（①、④）

起点テクストを辞書的意味で訳出すると理解しにくい字幕になってしまう場合、あるいは前後の字幕とうまくつながらない場合には、説明的な訳語にする場合がある。下に挙げた例の一部には、前に述べた「情報量の増減」の範疇に含まれるものもある。

V: 16/If…if Juan Antonio had never existed… I'd be fine with Doug.	16/フアンをあきらめるわ ダグでいいの
J: 17/Just…you'd… Just fine?	17/満足？
V: 18/Yeah, as I planned.	18/もう結婚したわ

#18 は起点テクストから離れた訳になっているが、これは#16 からの流れに沿った訳出ではないかと思われる。つまり#16 の起点テクストは仮定法であるが、字幕ではヴィッキーの気持ちが現在形で表されており、#18 はそれを説明する（「もう結婚してしまったから」という気持ち）ための字幕として訳出されている。しかし翻訳者の意図は別として、字幕内容に疑念を持つ視聴者がいるかもしれない。

『ローマ』の字幕の中には次のような例があった。

19/Pullo, single formation!	19/プッロ 隊伍を崩すんじゃない！

これは戦場で上官から兵士に発せられた命令である。発話の意図を明示するために、「隊列を乱すな」という含意を字幕にしたものと思われる。

20/Look here, Mars. Look here, Mars.	20/軍神マルスに捧ぐ

「マルス」だけでは何を指すのか明確でないため、「軍神」という語を補ってマルスの意味を明示化している。これは前述した「情報の増減」と考えることもできるだろう。

21/Why has he paid the debts of every reprobate fool	21/なぜ彼は愚か者の借金を すべて肩代わりする？
22/in this Senate house?	22/そこのお前たちのことだ

これは元老院でカトーが行ったカエサル批判の演説のシーンである。#22 の字幕は起点テクストから離れているが、映像を見るとカトーがカエサル派の議員たちを指さして言っているのが分かる。つまりこの場合、翻訳者は映画の音声コードよりも非言語視覚コード（登場人物の動き）を優先して訳出したと考えられる。起点テクストと離れた訳ではあるが、映像の助けもあり視聴者にとっては納得しやすい字幕かもしれない。

置き換え（①、③、④）

明示化の変形である置き換えは、空間的制約を持つ字幕の典型的な現象である（Díaz-Cintas & Remael, 2007, p. 204）。以下に挙げた中の下線部に置き換えの例を見ることができる。

23/Christina, who spent the last 6 months	23/クリスティーナは—
24/writing, directing and acting in a <u>12-minute film</u> which she then hated… （12 分の映画）	24/<u>短編映画</u>の脚本・監督・主演を こなしたが気に入らず—
25/I… I don’t know whether it is the wine. It could have been the <u>shellfish</u>…（甲殻類）	25/たぶんワインか <u>魚介類</u>のせいよ
26/Perhaps you have been unwell. <u>Goiters,</u> is it? （甲状腺腫）	26/ノドに <u>しこり</u>でも？

このように置き換えの方略が採用される一方で、中には#27 のように異文化要素がそのままの形で字幕に入れられる場合もある。

27/You also admire <u>Spanish guitar</u>, I hear.	27/<u>スパニッシュギター</u>も 好きだろ？

#27 の場合は、映画の舞台がスペインであること、ストーリーに占める重要性などを考えて、一般化せずにそのまま提示したものと思われる。異文化要素が置き換えや一般化などの処理をされずに、異質なまま提示される例として、ディアス＝シンタスとリミール（ibid. p. 202）は酒（コニャック）、料理名（マフィン）、地名、歴史的事実（ペレストロイカ）などを挙げている。

流行語の使用（④）

分析対象とした 2 作品を見た限りでは流行語の入った字幕は確認されず、流行語の使用は控えたいとするインタビュー対象者の語りが反映された結果となった。しかし異なる作品では別の結果が出ることも考えられ、本稿での分析結果を一般化することはできないだろう。

5. 期待に応えるための方策

字幕テクストを分析した結果、オリジナル音声と字幕の間には視聴者の疑念を生じさせると思われるいくつかの要因（情報量の増減、台詞の先取り、説明的な字幕、置き換え）が認められた。ここでは視聴者の疑念を軽減し、期待に応える字幕にするにはどのような方策があるのかについて、新しい字幕の形であるファンサブと関連づけて考察する。

5.1 ファンサブの頭注について

視聴者の期待する字幕を提示する方策を考えるにあたり、従来の字幕と異なる形態を持つファンサブに注目したい。ファンサブとは「さまざまな日本のアニメーション（anime）作品に、日本人以外の視聴者を対象として、アニメファンが非公式に付けた字幕」（O'Hagan, 2003）とされるが、最近では翻訳の対象が広がり、日本製以外のアニメや韓国ドラマでもファンサブが行われている（O'Hagan, 2009）。なお本稿でファンサブに言及する場合はアニメのファンサブを指すものとする。

ファンサブの形態については既にいくつもの研究で論じられているが（Caffrey, 2009; Beckman, 2008; Nornes, 1999; O'Hagan, 2003; Pérez González, 2007 など）、その特徴をまとめたのが次の 4 点である。

1） 字体とその大きさの多様性
2） 話者ごとの字幕の色分け
3） 画面上部に「頭注（headnote）」として解説を配置
4） 画面下以外の場所に置かれた多くの字幕的要素

（Pérez González, 2007: 71）

ファンサブを作成する人は訳出者であると同時に視聴者でもある。したがってファンサブの形態は視聴者の期待に沿ったものと思われ、視聴者の期待に応える映画字幕を探るうえで参考にできると考える。

上の 4 項目中、字幕内容と関連すると思われるのは「頭注」である。頭注とは字幕の中の訳

語について視聴者の理解を助けるために、画面上部に提示される解説を指す。その内容は台詞の語彙の説明、特に文化的要素についての解説が多いと考えられる。つまり頭注はメタ字幕としての機能を有しており、字幕の情報を補完する役割を果たすと言えるだろう。これについては次に挙げるファンサブ(『ぱにぽにだっしゅ！』)で確認することができる。

台詞の字幕) Wow! Tatami!　　頭注) Tatami is straw mat flooring typical in Japanese households.

It's like a ryokan!　　Ryokan is a Japanese style inn.

この例では頭注があることで、台詞の字幕は異文化要素をそのまま提示することが可能になっており、ファンサブでは従来の字幕に比べて異化的な訳出が多くなるのではないかと推測できる。

5.2　字幕の可能性

これまでの調査と分析の結果から、映画視聴者の字幕に対する疑念を軽減するには、情報量の増減や台詞の先取りを避けて、オリジナル音声と字幕が同時に提示されることが必要と考えらえる。その意味では、字幕に前述のようなファンサブの要素を取り入れることは、視聴者の期待に応える方策の一つといえるかもしれない。それを裏付けるように、海外で販売されている日本アニメの DVD の中には、頭注を選択するチャンネルで、台詞の字幕とそれについての頭注(pop-up gloss)を同時に提示できる製品もある(Caffrey, 2009)。一方、映画については、管見の限りでは劇場版に頭注が付いた例はないようだ。ただし映画でも DVD 化された場合には、ファンサブのように色付きの字幕、脚注、頭注の入った字幕が制作されることがある。その例としてディアス＝シンタスとリミール(Díaz-Cintas & Remael, 2007: 139-142)は、日本映画『座頭市海を渡る(Zatoichi's Pilgrimage)』と『子連れ狼　冥府魔道(Baby Cart in the Land of Demons)』に付けられた英語字幕を挙げている。

1)　I'll take your jitte.
(jitte: staff of office)

2)　"Genpuku Ceremony:" celebration of boys reaching adulthood, at ages 12-16.

…was deferred until her Genpuku Ceremony.

両作品の字幕の色は 5 色で、1)は『座頭市海を渡る』で字幕の下に脚注が付いたもの、2)は『子連れ狼　冥府魔道』の中の字幕で、下の 2 行が台詞の字幕、上の 2 行がその頭注である。これらは、字幕は 2 行までというルールや、目立たない字幕が良い字幕といった従来の規範から大きく外れているが、起点テクストの内容をより詳しく視聴者に伝える試みとしては有効かもしれない。ただ、こうした字幕は文字数が多いことから、どの程度の視聴者に許容されるかは

未知数と言えるだろう。また訳出に関して、視聴者には異化的翻訳と同化的翻訳の両志向が共存していることから、すべての異文化要素をそのまま提示することは、視聴者の期待にそぐわないだけでなく、認知的負担を増す結果になるかもしれない。

劇場の映画字幕に関しては現段階では大きな変化は見られないが、今後インターネットなどによって視聴者の期待が顕在化する機会が増えた場合、それに対応するために字幕関係者によって何らかの方策が取られることも考えられる。視聴者の期待によって字幕内容が改変された事例(『ロード・オブ・ザ・リング』)(O'Hagan, 2003)以来、制作側が視聴者の反応に敏感になっている、と筆者がインタビューしたある字幕関係者は語っている。発注側の意識の変化は、翻訳指示という形で翻訳者の訳出に影響を与えるであろうし、劇場版でも従来のルールや規範から外れた字幕が期待されるようになるかもしれない。言語間の字幕翻訳は「全体的に保守的であり、ファンサブなどに比べて、比較的狭い範囲の慣習によって支配されている」(Díaz-Cintas & Remael, 2007: 139)とはいえ、翻訳者の訳出を左右するとされる視聴者の期待が多様化している中でその期待に応えていくためには、従来の訳出方法を再検討するなど、新たな試みが求められるようになるだろう。

6. おわりに

本稿では外国映画の視聴者がどのような字幕を期待しているのか、それに応えるにはどんな方策が考えられるのかについて、ファンサブとの関連から考察した。今回実施した視聴者への調査は限定的なものであり、導き出された調査結果は一般化できるものではないが、視聴者の字幕に対する期待の一端を提示することができたと考える。また DVD 化された映画字幕に変化が現れていることは、従来の字幕の規範に関して交渉が行われ、新しい規範が生まれる可能性を示唆するものであろう。

【著者紹介】

篠原有子(SHINOHARA Yuko) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在学中。フリーランス字幕翻訳者。

【註】

1 今日、映像作品は映画館における鑑賞以外に、テレビ、DVD、インターネットなどを通しても可能であり、個人の中でもその視聴形態は多様化していることから、本稿においては調査対象者を「視聴者」と提示する。

2 以下、引用はすべて筆者による訳である。

3 この質問の回答選択肢はウィドラー(Widler, 2004)によるアンケート調査の選択肢に準じた。

4 戸田(1997, p. 59)は読みにくい字幕の例として「ギャグ」や流行語入りの字幕を挙げる。

【参考文献】

Beckman, R. (2008. 11. 16). An out-of-character role for subtitles. *The Washington Post*.[Online] http://www.washingtonpost.com/wp-dyn/content/article/2008/11/14/AR2008111400700.html（2012 年 6 月 14 日）

Bogucki, L. (2009). Amateur subtitling on the Internet. In J. Diaz-Cintas & G. Anderman (Eds.), *Audiovisual translation: Language transfer on screen,* (pp. 49-57). Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Caffrey, C. (2009). Relevant abuse? Investigating the effects of an abusive subtitling procedure on the perception of TV anime using eye tracker and questionnaire, Dublin City University 博士論文 [未刊行].

Chesterman, A. (1997). *Memes of translation: the spread of ideas in translation theory.* Amsterdam: John Benjamins.

Díaz-Cintas, J., & Remael, A. (2007). *Audiovisual translation: Subtitling.* Manchester & Kinderhook: St. Jerome.

Gottlieb, H. (1993). Subtitling: People translating people. *Teaching translation and interpreting 2* (pp.261-274). Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.

Leonard, S. (2004). *Progress against the law: fan distribution, copyright, and the explosive growth of Japanese animation.* Massachusetts: MIT. [Online] http://web.mit.edu/seantek/www/papers/progress-columns.pdf (2012 年 6 月 14 日).

Lomheim, S. (1999). The writing on the screen. Subtitling: A case study from Norwegian broadcasting (NRK), Oslo. In G. M. Anderman (Ed.), *Word, text, translation,* (pp. 190-208). Great Britain: Multilingual Matters.

Nornes, A. M. (2004[1999]). For an abusive subtitling. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp.447-469). London & New York: Routledge.

O'Hagan, M. (2003). *Middle earth poses challenges to Japanese subtitling.* [Online] http://www.translationdirectory.com/article441.htm（2012 年 6 月 23 日）.

O'Hagan, M. (2009). Evolution of user-generated translation: fansubs, translation hacking and crowdsourcing. *Journal of internationalization and localization 1* (1) (pp. 94-121).

Perez Gonzalez, L. (2007). Intervention in new amateur subtitling cultures: a multimodal account. *Linguistica Anterpensia.* 6: 67-79.

Vandeweghe, W. (2005). *Duoteksten. Inleiding tot vertaling en vertaalstudie.* Gent: Academia Press.

Widler, B. (2004). A survey among audiences of subtitled films in Viennese cinemas. *Meta,* 49: 98-101.

外国映画輸入配給協会（2011）「作品目録」[Online] http://www.gaihai.jp（2011 年 10 月 12 日）

ピム，A.（2010）『翻訳理論の探求』（武田珂代子・訳）みすず書房 [原著：Pym. A, (2010). *Exploring translation theories.* London & New York: Routledge].

田中純一郎（1976）『日本映画発達史 I～III』中央公論社
戸田奈津子（1994）『字幕の中に人生』白水社

【引用作品】

『それでも恋するバルセロナ（Vicky Christina Barcelona）』ウディ・アレン監督．発売元：アスミック．
『ROME ローマ』マイケル・アプテッド他監督．発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ．

【資料】

視聴者に対するアンケート調査の質問事項は以下のとおりである。

A. 日本映画と外国映画のどちらを多く見ますか。
（1.日本映画 2.外国映画 3.同じ程度）

B. 1 本の映画に字幕版と吹き替え版があるとき、主にどちらを見ますか。
（1.字幕版 2.吹き替え版）

C. それはなぜですか。
・字幕版と答えたかた（1.俳優の声が聞けるから 2.雰囲気が感じられるから
3.語学の勉強になるから 4.その他）
・吹替え版と答えたかた（1.分かりやすいから 2.雰囲気が感じられるから
3.字幕を読むのが面倒だから 4.その他）

D. 字幕を読んで文字数が気になることはありますか。
（1.よくある 2.時々ある 3.考えたことがない）

E. あなたの知らない商品名や地名が字幕に出てきたとき、どう思いますか。
（1.何だろうと興味がわく 2.違和感がある 3.特に感じない）

F. 流行語が入っている字幕を見たとき、どう思いますか。（例：ドヤ顔、イクメン）
（1.面白い 2.変な感じがする 3.特に感じない）

G. 字幕では重さや距離の単位を換算（ポンド→グラム、フィート→メートル）して出していますが、そのことについてどう思いますか。
（1.換算せずに外国の単位で出すのがよい 2.今のままでよい 3.考えたことがない）

H. 字幕に違和感をもつことがありますか。（1.ない 2.時々ある 3.よくある）
・「ある」と答えたかた…どんなときですか。
（1. 字数が多いとき 2.矢継ぎ早に字幕が出るとき 3.映像に集中したいとき 4.見慣れない言葉のとき 5.セリフと字幕の内容が合っていないと感じたとき 6.その他）

I. 映画字幕について感じていることを自由にお書きください。